思考する価値の自覚に向けて

「思考する」ことには，いくつかの困難がある。ここではその困難を【A.「思考する」方法がわからない困難】【B.「思考する」価値がわからない困難】と分けて考えてみよう。

もちろん，この２つの困難は相互に関係しているが，分けることで，私たちは子どもたちが（あるいは私たち自身が）なぜ「思考する」ことができないのかを考え，対応を試みることができる。

Aでつまずいている場合には，思考を助ける具体的な手立てを手に入れることが必要になるだろう。関西大学初等部をはじめ，近年全国的に思考ツール（シンキングツール）の活用が広がっている。思考ツールとは，ピラミッドチャートやフィッシュボーン図など，比較や分類，情報の構築について可視化し，思考を補助するツールである。国語教育研究における近著としては，山本茂樹【編著】『ビジュアル・ツールで国語の授業づくり思考力を育てる10のツール』（東洋館出版社，2015.7）がある。国語科固有の教科内容としては，「語り手」や「視点」などの用語やそれにともなう方略も思考を助けるものである。また，「思考する」ためには，前提となる知識が必要な場合もある。「思考」をともなう課題を構成する際には，その課題がどのようなツールや用語，方略，知識などを要求する課題であるのかを検討しておくことが必要になる。

一方，Bでつまずいている場合については，どう考えればよいのだろうか。先にあげた思考ツールについても，やみくもに導入すると，「ツールを使わされている」ことになり，「価値はわからないけれど，先生に言われているから思考している」状態になるおそれがある。この場合，授業中はあたかも「思考する」ことができているようにみえても，その授業のあとにつながる学習にはなっていないかもしれない。あるいは，「よりよい考え」を求めるのではなく（「主体的に追求する」のではなく），「なんとなくの落としどころ」を求める（「受動的に追求する」）ことになってしまうかもしれない。2015年度において国語科が取り組んだのはこの問題であった。それは，学習の場において，子どもたちが「思考する価値」を理解することができるように授業を構成すること，すなわち，「よりよい考え」の追求過程を構成しようということである。

公開研究会における授業場面から，より具体的に考えてみよう。公開研究会において，小学校では説明的文章教材「想像力のスイッチを入れよう」を用い，「要旨を読みとる」ことを目指した学習が行われた。また，中学校では「よりよいディベート」を目指した学習が行われた。この２つの授業では，どちらも「よりよい考え」の構築が目指されている。

小学校における要旨の読みとりは，文章の最後の段落をそのまま要旨と「考えやすい」ところにポイントがあった。教材「想像力のスイッチを入れよう」における最後の段落は，筆者の主張をまとめている段落ではあるが，抽象度が非常に高く，その段落だけを読んでも何が言いたいのかわからない。そのことに気づくことによって，「もっと考えなければならない」ことに思考が向かっていく。ここで必要なのは，自分たちの考え（要旨）を評価し，「これで十分か」ということを考えることである。そのためには，「十分」を判断するだけの目的意識や相手意識が必要になる。

中学校におけるディベートでは，実際にディベートを展開する中で，「突然の話題の転換（反論に対し，まったく違う話題を出す）」や「突然の新事実の追加（それまでの議論にはなかった情報を付け加える）」が見られた。これらは，よりよく考える（議論する）場合には，適していない方法である。この展開の中で注目すべきは，このような発言に対して「そんなのありか」と子どもたちが素朴につぶやいていたことである。ゲームにおける「反則」を指摘する言葉ではあるが，ここには，「よりよい考え」についての気づきの萌芽がある。なぜ「反則」なのかを考えることで，「よりよい考え（議論）」はどのようなものであるべきかを考えることができる。

思考する価値の自覚には，思考した甲斐を感じることが必要である。目的意識や相手意識に基づく自分たちの考えの評価は，その甲斐を感じるためにも必要なことだと考えられた。

（共同研究者：初等教育開発講座，冨安　慎吾）